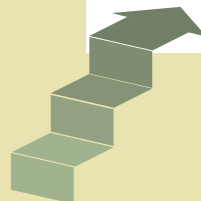




高崎の浮世風呂

昭和レトロな庶民文化を満喫できる



全国で最も古いか!? 90年前の木造銭湯が健在

●高崎に残る庶民文化「銭湯」

「あなたは、もう、忘れたかしら」と「神田川」に唄われた所謂横丁の銭湯が、高崎市内に5軒残っている。それぞれの銭湯の屋号も味わい深い。住宅街の中に突き出た高い煙突が目印で、風呂のない家が多かった時代、夕方になると手桶に石鹸やシャンプー、タオルを首にひっかけて、下駄やサンダルで銭湯に出かけたものだ。

●宿場町高崎城下の浮世を映す「湯屋横丁」

本町一丁目の裏路地「湯屋横丁」と呼ばれる場所が、高崎の銭湯の発祥の地である。ここにはつい最近まで「成田湯支店湯」が残っていた。この



●浅草湯 / 成田町 36-3 電話 027-323-1745
午後2時から午後10時。火曜定休。駐車場10台。料金は大人(中学生以上)400円、中人(小学生)180円、小人(幼児)80円。石鹸やシャンプーは持参。使い切り用が販売されているので手ぶらでも可。

湯屋は今から300年前、宝永2年(1711)に始められ、高崎宿の名物となっていた。今のように毎日入れるわけではなく、毎月8日、14日などと、決められた日に身を清める意味から6日間営業するので「六斎湯」と呼ばれた。やがて城下に銭湯が増えて10軒となるが、その後政府が衛生向上のために奨励を始める。明治初年まで藩の許可が下りず新規の営業はできなかった。初期の湯屋は下着を着けて入浴する混浴で、浴槽も大きな丸桶一つだった。これでは風紀を乱すということで、女は昼、男は夜などと時間が分けられた。花街柳川町の芸妓の姐さんたちが、夜のお座敷の前に湯に通う艶やかな姿はまるで錦絵のようで、高崎城下の浮世を映していたという。

●浅草湯は昭和初期に建てられた現役銭湯

湯屋横丁の路地から、北に徒歩で5分ほどのところに大正時代に創業した「浅草湯」がたずねている。創業時は現在の倍ほどの建屋で、2階は宴会場になっていた。浅草湯は昭和4年(1929)に火災にあい、再建する際に東京都内の銭湯を回って研究したそう、当時の下町銭湯の特徴となる豪華な寺社風の「宮造り」となっ

ている。宮造りが流行ったのは、関東大震災(大正12・1923)で被災した人々が、銭湯を極楽浄土や別天地へ誘う特別な場所として考えたためで、浅草湯には当時の建築様式が残っている。入母屋造りの玄関を入ると、脱衣所の天井は2階ほどの高さまで吹き抜けた格子づくり。柱や梁は太く、男湯と女湯を仕切る壁には大きな鏡がはめ込まれている。浴室の窓や脱衣所から池のある和風庭園を眺められるのも当時のぜいたくで、まさに「極楽、極楽」である。

東京都内で最も古い木造建築の銭湯(今年5月に閉館)が昭和2年の建築であったことから、築80余年の浅草湯は、現役で営業する宮造り様式の銭湯として、全国でも大変貴重と言えるだろう。

銭湯にはゆったりとした懐かしい時間が流れている。桶を置く音が、銭湯独特の心地よい残響を伴って聞こえてくると、ノスタルジックな世界への小旅行が始まる。昭和レトロな高崎のまちなみを味わえる中央銀座商店街や高崎電気館などとともに、日々、市民に愛され続ける高崎の貴重な財産である。なお、銭湯や温泉でおなじみの黄色いケロリン桶は高崎市内のプラスチック工場で作られていることを付記しておきたい。